雲と正太のこと

坪田譲治

昔のことです。正太が六つか七つの頃、私と二人で、散歩していました。夏のことで、遠くの空に、雲の峰がムクムク聳え立ち、白銀色に光っていました。それを見ると、正太が言いました。

「お父さん、ボク、あんな雲を見ると、あそこに行って見たいと思うよ。お父さん、そう思わない？」

これをきくと、私はちょっと考えました。美しい話で、それは私のいつも思うところなのです。だから、一も二もなく、

「お父さんも、そう思うよ。あんな雲を見るごとに、いつでもお父さんはそう思ってるんだ。子供の時から三十年も四十年も、そう思って来たんだよ。」

そう言うのがいつわらない本心だったのです。ところが考えました。考えたというのも、その頃、私は貧乏していたからです。その貧乏の故に、妻子を哀れに思っていたからです。だが、ナゼ私は貧乏だったのでしょう。私が文士だったからです。昔から、吾国に於ては、文士というものは、貧乏にきまっていたのです。そこで、その頃私のキモに銘じて考えていたことは「自分はもうここまで来たんだから、文学の道は捨てられない。然し子供たちは、決して決して、文士などさせてはならない。」

日頃、そう考えていたのですから、正太が雲の峰を美しがり、そこへ行って見たいという感想を語っても、私は考えざるを得なかったのです。

「まて、まて、ここで正太の空想に同意したりすると、正太の奴、ますます空想をたくましくして、遂には文学の道に深入りするようなことになるかもしれない。これはシンチョウに答え

なくては――。」
とっさに、私はそんなことを考えたようです。で、言ったのです。
「そうだな。お父さんは、あんなところ、行きたくないね。」
ところが、次に言うことがないのです。正太は正太で、
「フーン。」
と言ったきり、話を切ってしまいました。
さて、それから三十年ほどたちました。正太は三十六七になってるようです。ところが、今になって、その時のことが私にはしきりに思い出されてくるのでした。それも大変後悔されて、思い出されてくるのです。然しナゼ後悔なんかするのでしょう。正太は、私が文士なんかにならせたくないと考えた通り、自分でも、文士なんかにはならないよと言って、遂に文士にはなりませんでした。社会事業というのでしょうか。児童保護という方に仕事の道を選びました。仕事としては立派な仕事で、文学と比べて、まさり、劣りはありません。それならば、何を私は後悔したりするのでしょう。
「雲の如く高く、くもの如く輝き、雲の如く囚われず。」
これは小川未明先生がこの間画仙紙に大きく書かれた言葉でありますが、実のところ、私はこの雲が大好きなのです。空の星をたたえる人は、昔から無数にあります。然し雲の美しさを歌ったり書いたりした人は少ないのではないでしょうか。これは美しい雲の出ることが少ないのにもよるでしょう。ところで、美しい雲とは、どんな雲でしょう。夕焼雲なども、そう言えるでしょうけれども、私は夏の日中、遠い空際や近い空際に立つ、この雲の峰にしくものなしと思うのであります。それは全く白銀の宮殿のようであります。アラビヤンナイトや、その他異国の童話の中などにその宮殿は立っていたような気がします。いや、なかったかも知れませんが、私はいつもそんな空想をするのであります。物語の中、それも遠いむかしの童話の中ででもなければ、そんな宮殿なんか、あろう筈がありませんが、そういう宮殿が目のあたりに見られるのは、この雲の峰ばかりです。言わば、それは童話が雲に姿を変えて、そこに、空の上高々と、白銀の輝きも美しく出現したようなものであります。それを私は、不覚にも、子供の前で否定したのであります。それに、その時、子供は心の窓を開き、常々そういうことに理解ある父の心を期待して話しかけて来た時、私は冷い返事をしたのであります。後悔せざらんとしても、得ずというところであります。然しその時から三十年の年月がたっていて、どうしていいか解りません。もう三十六かになる息子に、そういう話をしたところで、笑われるばかりであります。然し一方から言えば、この三十年もの永い年月がたっているだけに、私の後悔も深いのであります。彼が三十年、雲の峰の美しさ、ひいては童話の美しさ、そしてそういう夢とか、空想とかいうものを否定して生きて来たのではないか。それを思うと、何ともすまない気持がするのであります。